

# 糸魚川市根知谷における方言語形とその変化について ——「蛇の抜け殻」「かわにな」「たにし」を例に——

荻野真友子

【キーワード】語形変化、分布、語源解釈、民間語源、『糸魚川言語地図』

## 1. はじめに

新潟県西南部に位置する糸魚川市とその周辺は、『糸魚川言語地図』(柴田・グロータース 1988-95、以下LAI)において取り上げられ、日本の言語地理学的調査における「記念碑」的地域として知られている。

本稿では、LAIとそれに関わる先行研究、またその後の当該地域の調査(石川恵美子・柴田武 1977)から、特に伝統的方言形が保存されていると認められた糸魚川市根知谷において、現在の言語活動の実態はどうであるか、小動物関係の語形を取り上げて考察することを目的としている<sup>1</sup>。本稿では、調査の概要と、調査結果から語形の使用状況に変化の認められる「蛇の抜け殻」「かわにな」「たにし」を表わす語形を取り上げる。

## 2. 調査方法

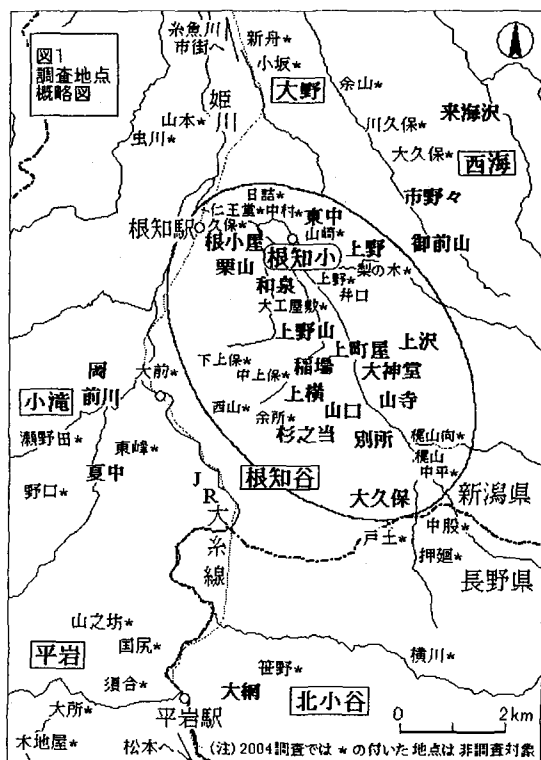
言語地理学的観点から、高年層を対象にした面接調査<sup>2</sup>を行なった(以下、2004調査と呼ぶ)。調査対象は糸魚川市根知谷とその周辺地域<sup>3</sup>の大字をそれぞれ一地点

<sup>1</sup> 本稿は、同様の目的から取り組んだ2004年度早稲田大学大学院教育学研究科修士論文「糸魚川市根知谷における語形の変遷とその要因—小動物名を例にした糸魚川言語調査の再検討—」に基づく。

修士論文のための調査では、高年層を対象とした面接調査と、年代別アンケート調査(根知小学校の3-6年生(当時)と30-50歳前後が調査対象)を行なった。調査項目は小動物を表わす語形とそれに関係する事項で、高年層調査が81項目、年代別アンケートは19項目。なお年代別アンケートについては、先に行なった高年層調査の結果と先行研究とを踏まえ、特に地域別変種と年代別変種とが現われるであろう項目に限定して行なった。

<sup>2</sup> 主に話者の自宅での単独面接調査を行なった。調査者(筆者)は1980年に糸魚川市大野(根知地区より糸魚川市街側)に生まれ、高校卒業まで同地に住み、大学進学から現在(2006年1月)までは東京在住の25歳女。

<sup>3</sup> 周辺地域とは、古来交通があったとみられる糸魚川市西海(御前山・市野々・来海沢)・同市小滝(前川・岡・夏中)・長野県小谷村(大網)の数集落である。このうち、御前山は根知上野集落と道が通じているほか、もと根知に組み込まれていた時期があり、隣の市野々は学制が布かれてから御前山と同じ学区になっていた。根知谷から小滝へは根知西山集落を通り小滝尾巻・大前集落へとつながるが、そのどれもが廃村状態であるため、前川・岡と小滝の中心地である夏中を対象とした。根知谷と大網は松本街道によりつながっている。松本街道は糸魚川から根



とした、根知 16 地点、  
周辺地域 7 地点の計 23  
地点(図1調査地点概略図、  
根知谷は線で囲んだ中)。  
原則として、生え抜きで  
ある 70 歳前後の男女を  
対象とした<sup>4</sup>。調査時期は  
2004 年 8 月。

調査項目は、石川・柴田  
(1977)において、子供に  
よる「改新の激しい」分野  
であるとされた昆虫・小  
動物の語彙とした。調査  
の際の質問には、昆虫・  
小動物などの写真を見せ  
ながら、大きさや鳴き声  
などの特徴をヒントとし  
て与え、自由回答を求め  
た後に、あらかじめ得て  
いる情報<sup>5</sup>から誘導・確認  
を行なった<sup>6</sup>。このよう  
にして質問した結果、併用  
語形がいくつもあるよう

なときは、そのそれぞれについて、新旧の判断を求めた<sup>7</sup>。

知仁王堂に入り、根知川を上り、山口から大網峠を経て信州へ塩や魚を運んだ道とされる。

<sup>4</sup> 適当な話者がいない場合は、その地点で 5-15 歳までを過ごした方とした。今回、分析対象とした話者は 28 人で、平均年齢は 73.3 歳。

<sup>5</sup> 主として、LAI や『信州方言風物誌』(福沢武一 1956)の中でこの地域で使われているという報告のある語形を確認した。

<sup>6</sup> この質問形式を採った理由は、ほとんどの地点でまず全国共通語形を答えることが予想されたため、理解語形あるいは以前使っていた語形を確認するために行なった。なお、誘導によってそれがそのままの状態で答えられるだけのことはなかった。与えた語形が刺激となって、例えば「くさざかめむし」については「ジョーロムシとは言わないがオンナジョロと言う」のように回答があり、他の項目でもこのようなやりとりは多かった。

<sup>7</sup> なお「古い」との回答だった場合には、「子ども専用の語形か、それとも昔は広く行なわれていた語形か」ということを問うようにした。また、新旧の判断が直接に示されない場合は、「現在の小学生に対してならどういう語形を用いるか」という質問によって補った。しかしそれでも、新旧判断に相当する回答のなかった場合も多い。

### 3. 2004調査の結果と分析

#### 3. 1. 2004調査全体の結果の類型

ここでは調査結果の概略を示し、その後、「蛇の抜け殻」「かわにな」の語形の変化と、「たにし」の現在の使用状況について述べたい。

まず、項目ごとに語形の使われ方による分類をすると、i.全国共通語形<sup>8</sup>が専用されている、ii.全国共通語形と伝統的方言形が併用されている、iii.伝統的方言形が用いられている——とみる事が可能である(伝統的方言形のうちには、地域共通語形も含む)<sup>9</sup>。

また、それらの地理的分布の状態は、a.(1)根知谷にのみあり、かつ根知谷全域に分布する、a.(2)根知谷にのみあり、かつ根知谷の中で分布地域が分かれる、b.(1)根知谷を含む広域にみられ、かつ根知谷全域に分布する、b.(2)根知谷を含む広域にみられ、かつ根知谷の中で分布地域が分かれる、c.周辺地域にあるが根知谷では得られない——のようになる<sup>10</sup>。

この分類では、「蛇の抜け殻」は iii.b.(1)に該当する。「かわにな」は iii.であり、分布は b.(1)に該当する語と c.のものがあり、「たにし」は ii で、その伝統的方言形は b.(1)の状態である。

#### 3. 2. 「蛇の抜け殻」を表わす語形

##### (1) 調査結果と分析

「蛇の抜け殻」については、あらかじめ「蛇の総称」「まむし」「青大将」を表わす語形を聞いたあとで、「こういうものの抜けた後の殻のことを何と言いますか」と質問した。その後さらに、「では殻から出ることを何と言いますか」と問い、「蛇が脱皮する」ことを表わす表現形式も確認している。

調査結果(図2)を見ると、全体的にキンとキヌとが散らばっているように見えるが、下根知ではキン、上根知ではキヌ、大網・夏中以外の周辺地域ではキンが多く行なわれている。また、これにはそれぞれ語源解釈が回答されており、上野と和泉ではそれぞれキンという語形に対し「金」、御前山・市野々・前川ではキンに「着物」、上横ではキヌに「着物」、大神堂ではキヌに「絹」と述べている。また市野々では「比喩的に薄着になることを言う」との回答もある。一見同様にキンが使われている地域でも、上野・和泉と御前山・市野々・前川では想定されている語源が違う。

<sup>8</sup> 本稿では、全国共通語または標準名と同形式の語形のことを「全国共通語形」として扱う。

<sup>9</sup> それぞれ該当するものを挙げると、i.「かまきり」のカマキリ、「すずめ」のスズメ、ii.「たにし」のタニシとツブ、「青大将」のアオダイショウとアオロチ類、iii.「かわにな」のビンロージ類・ビンノジョーなど、「くさぎかめむし」のヘクサムシ・ヘクサ・ヘクサノダンナ——などである。

<sup>10</sup> それぞれ該当するものは、a.(1)「おたまじゃくし」のトローッコ、a.(2)「おにやんま」のオマトンボ(下根知)とフジトンボ(上根知)、b.(1)「かわにな」のビンロージ類を含む今回取り上げた項目、b.(2)「てんとうむし(害虫)」のワンカズキ、「ひきがえる」のヒクパンバ類、c.「かわにな」のビンノジョー類(小滝)、「おにやんま」のサワトンボ(小滝)・オーヤマトンボ(西海)——など。

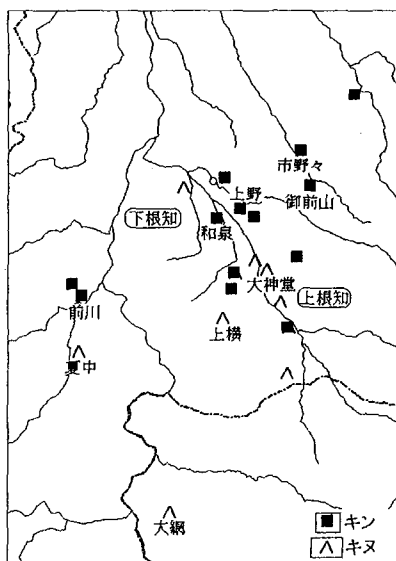


図2 2004調査【蛇の抜け殻】<sup>11</sup>

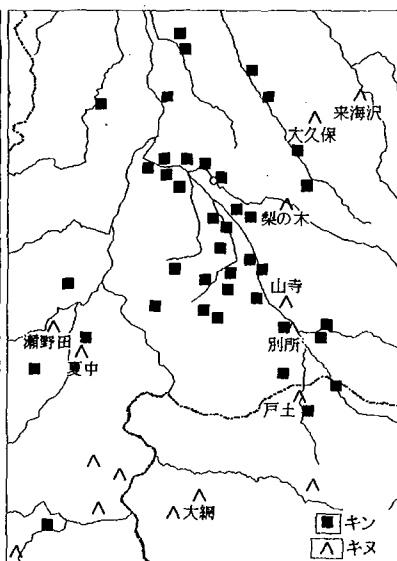


図3 LAI1961【蛇の抜け殻】

LAI(図3)では、根知谷一带をキンが覆うが、2004 調査ではキヌの地点が現われる。また、同調査において「脱皮する」を表わす形としては、キンオヌグ・キンオノグなどキン…が盛んであった。「抜け殻」をキヌと言うとした地域で「脱皮する」をキンオヌグなどのキン…とした地点が多くあるのに対し、「抜け殻」をキン、「脱皮する」をキヌ…とした地点は少ない。まとまった表現としてキン…が広く分布し、キヌは単独の形で表われやすいことから、古くはもっと単独形キンの地域が広がったのではないと思われる。

## (2) 他の資料から

この語は『日葡辞書』(日本イエズス会 1603-04)<sup>12</sup>に「Qinu. キヌ(衣)蛇が年毎に脱ぎ変える皮。『Qinuonugu. (衣を脱ぐ)蛇が皮を脱ぐ、または、皮を変える。』と載っている。『本草綱目啓蒙』(小野蘭山 1803-06)<sup>13</sup>にも、「蛇蛻」の箇所に「ヘビ

<sup>11</sup> 「殻のことを何というか」という質問に対する回答から。ここではキヌとキンにのみ注目し、他の語形(ヌケガラ・カワなど)は示さなかった。なお作図には、「地理情報分析支援システム MANDARA 7.00」を使用した。

<sup>12</sup> ここでは土井忠生・森田武・長南実(1980)による。なお「Qinu.」の項目は 1604 年刊の補遺で追加されたようである。

<sup>13</sup> 杉本つとむ編(1974)による。

ノキヌ」が見える。その他、各地の方言集にも見られ、『全国方言辞典』（東條操編 1951）によれば、和歌山・岡山県児島郡・徳島県美馬郡にキヌ、岐阜県古城郡にキンの形が報告されているという。『新潟県方言辞典 佐渡編』（渡辺富美雄 1974）も、「きん」の項目を立てて「蛇のぬけがら。例 ヘビがきんをのぐ。（金井町東平清水）」と記す。

『さとことば』（幸田文時編 1925、新潟県西蒲原郡）には、「きんのぎづえたち〔名〕旧暦六月一日（今は新暦七月一日をいふ）〇きぬぬぎついたち（衣脱朔日）の転。」とあるが、このように記録が残っているのは、年中行事として存在していたからだと考えられる。民俗学的資料に目を移すと、「新潟県の民俗」（新潟県教育委員会 1965）<sup>14</sup>には各地区の年中行事が書かれており、これによると、新潟県北部から東頸城郡までは旧暦の6月1日またはそれ以降に、「きんぬぎついたち」「きんぬぎの日」という日が設けられ、蛇が桑の木の下で脱皮をするから行ってはいけないという言い伝えや、餅を食べる風習があるという。また、『歳時習俗語彙』（柳田國男編 1939）では、越後の各郡と佐渡、信州北安曇郡にこのような風習があるという。東北地方にも似たような年中行事が記録されており、古くは広く行なわれていたと思われる。

LAI では、「蛇の抜け殻」について、根知谷一帯をキンが覆うとしたが、2004 調査の地域と重なるところで、キヌがあるのは来海沢・大久保<sup>\*15</sup>・梨の木<sup>\*</sup>・山寺・別所・戸土<sup>\*</sup>・大網と夏中・瀬野田<sup>\*</sup>であり、大網から来海沢へ一本の道が通っているかのように見える。これを LAI は次のように解釈している。

この分布から見て、かつては全域にkinuが分布していたと考えられる。信州はまだその状態を完全に残している段階にある。

kinuから変化したkinが新勢力として糸魚川町部から周囲に広がるに従って、kinuが南の方へ追いやられ、また、それぞれの谷の奥へ押し込められるに至った。

さて、ここで問題となるのは、キヌ→キンという推定がなされていることである。2004 調査の結果では、キヌが領域を広げ、キン→キヌへなりつつあると考えられるほうが自然であるが、そうであるならば、LAI と 2004 調査との間にキヌ→キン→キヌという回帰があったとみるべきであろうか。

### (3) 「蛇の抜け殻」を表わす語形の変化の要因

「蛇の抜け殻」を表わすキン・キヌの語形は、長野県側ではキヌが優勢で、新潟県側ではキンが優勢であつたらしい。糸魚川地域でもやはりキンが多かったが、長野県側にあったキヌも入り込んでおり、キヌ・キンに対する民間語源説には「衣」「絹」と解釈するものが多かった。その後、点々とあったキヌが勢力を拡大し、2004

<sup>14</sup> 大島曉雄・松崎憲三・宮本袈裟雄・駒形聡編(1996)による。

<sup>15</sup> 2004 調査で取り上げなかった地域(廃村などによる)は \* を付けた。

調査のような分布となる。しかし、根知川下流域まではなかなか広がらない。それは、下流域(上野・和泉)では「金」という語源解釈が起こり、それによってキンのほうが適当であるという判断がなされたからであろう。周辺地域では同じようにキンとしているが、未だ「衣」の語源解釈が残るところもあった。

このように考えると、語形の変化としては、少なくとも LAI(1961)以降は、キン→キヌである。しかし、実際には既に根知川下流域ではキン・キヌが報告されないところもあった。とくに小学生には、全くといっていいほどこれらの語形は現われない。

### 3. 3. 「かわにな」を表わす語形

#### (1) 調査結果と分析

「かわにな」は「たにし」と並べた写真を提示して、一方は細長く、もう一方は丸みがあるということを強調して質問した。

その結果、ピンロージ・ピンドージ・ピンドジ・ピンドジョ・ピンノジョーの五つの語形が報告され、3 拍目のロ・ド・ノと末尾形式に注目して、2 枚の地図を作成した(図4、図6)。3 拍目を見てみると、-ノ- は分布がかたまっているが、-ド-・-ロ- は入り混じっている。末尾の形式については、-ージ・-ジが報告されている地点が多い。これらを合わせて見たとき、ピンノジョーについては、分布範囲が小滝地域に限られることに気づく<sup>16</sup>。他の語形はやはり入り混じっているとしか見ることができない。

なお、この項目について全国共通語形ニナ・カワニナは、高年層においてはほとんど報告されなかった<sup>17</sup>。

#### (2) 他の資料から

LAI を見てみると(図5、図7)、根知谷は -ロ- が一帯にある。小滝はやはり -ノ- である。ここには表わしていないが、糸魚川市内の、根知谷以外のほかの谷では、-ロ- と -ド- が入り混じった分布となっている。

さて、この語形を他の資料に求めてみると、『本草綱目啓蒙』『蝸羸』の項に「ピンロウジ 能州」「ピンロジ 加州」という記述が見える。『信州方言風物誌』でもピンロージ・ピンロジ・ピーロンジ・ベンロージ・ベンロジなどが挙げられており、根知谷と接する北安曇郡ではピンロージが広く分布しているようである。細野淳(1954)でもピンロージやゲンロージがみられ、ほかにベベツブ・カワツブという語形もあるという<sup>18</sup>。浅川清栄(1958)も長野県における「かわにな」の方言として、

<sup>16</sup> 根知谷の入口でピンノジョー形があるが、この話者は他の項目においても全国共通語形の報告が多く、その地域の方言語形を回答しているかどうか疑問を残す。

<sup>17</sup> 年代別に行なったアンケートでは、小学生が全国共通語形を答えていた。

<sup>18</sup> 『小谷村誌』にはカワツブのみが記されている。

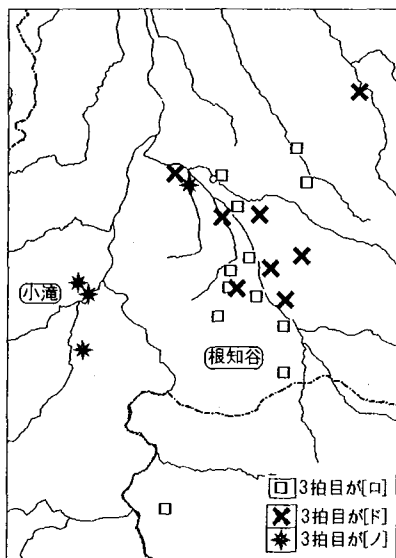


図4 2004調査【かわにな】3拍目

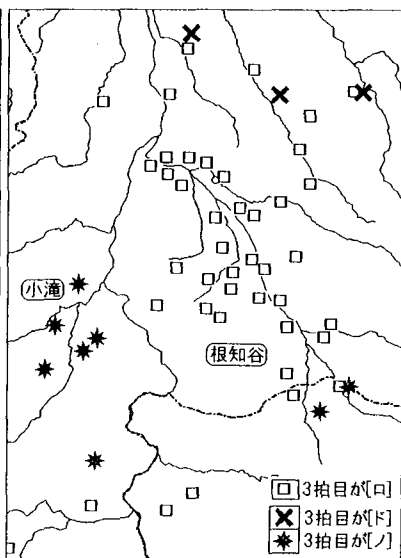


図5 LAI1959【かわにな】3拍目

図6 2004調査【かわにな】末尾形式

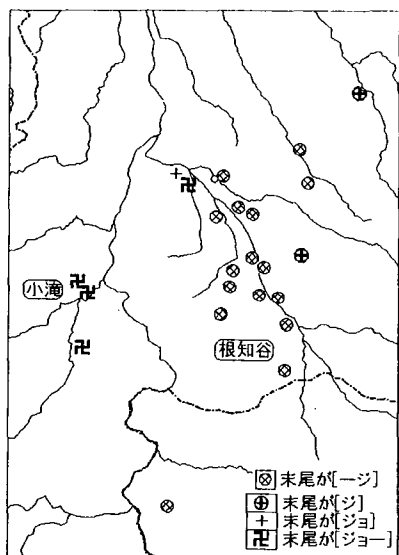
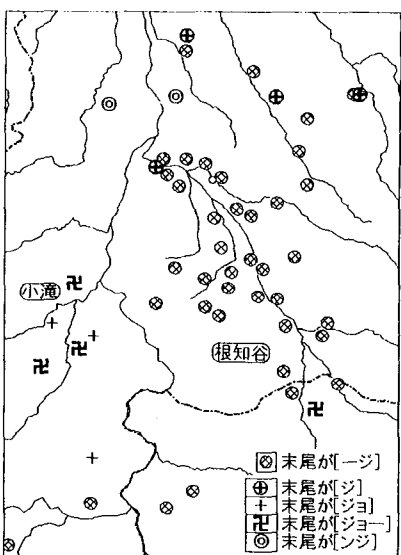


図7 LAI1959【かわにな】末尾形式



ビンロージ形が広く分布することを示している。ここにはカワニナという現在の全国共通語形とともに、ニラ・カワニラという語形も取り上げており、これは山梨や群馬にもあるとする。寺島虎男(1907)や『新潟の言葉』(鶴巻武漢, 2001)にはただビンロージだけが挙げられている。『さとことば』には「びんらうじ」が二つあり、一つは「田又は溝梁に棲む貝の名(螺旋ありて、一方太く他方に向ひて真直に細くなりゆき、はては尖れり)」とあるように「かわにな」のこのようだが、もう一つは「酒を暖むるに用ゐる石器(上は太く、下に向ひて細くなりゆき、その端尖る。それを火気ある灰の中につきさして用ゐるなり)」とある。

### (3) 「かわにな」を表わす語形の変化の要因

信州を含め北陸一帯で、古くからビンロージまたはそれに類する -ロ- の語形が行なわれてきただろうことは、先行の資料によって明らかになった。

そこで、LAI の分布を見ると、根知谷には -ロ- が広くあるが、それををはさんで、小滝では -ノ-、西海・大野や糸魚川市街では -ド- と -ロ- が両方行なわれるという状態である。そして 2004 調査の結果を見ると、-ロ- の地域は -ド- も分布し、-ノ- の地域は -ノ- のままである。-ノ- の地域に以前は -ロ- が分布していた可能性も否定できないが、変化の過程はド→ノという順ではなく、ロ→ノという変化が起きただろうと推定される。それは -ノ- の地域と -ド- の地域が LAI で接していないことからわかる。また、これは LAI で他の地域を見たときにわかることだが、糸魚川市街部や根知谷の隣の谷では -ド- と -ロ- の混乱は既に起きており、それが根知谷にも及んでいるとみることができる。このために、LAI で -ロ- しか現われなかった根知谷にも 2004 調査では -ド- が現われたのであろう。このような推定から、3 拍目に関しては、ロ→ノとロ→ドという変化があったということが考えられる。

では、末尾の形式についてはどうであろうか。これは今回の調査のみにより推定することは難しいが、-ージが短縮され -ジ、その後 -ジョ、-ジョーと変化していったのであろう。ビンノジョーについては既に別の変化が起きているとして扱わなければならないのかもしれない。それは、やはり想像の域を出ないが、「ビンノジョー」という語構成意識がはたらき、-ノ- を助詞の「の」として見た可能性も考えられる。これにより、語形が安定し、50 年近くを経てほぼ姿を変えず残っているのではないか。もし、そのようなことがあるならば、これも語源解釈の問題である。

## 3. 4. 「たにし」を表わす語形

### (1) 調査結果と分析

「かわにな」に関連し、「たにし」についても少し触れたい。これに対する質問は 3.3. で述べた通りだが、回答は少し様子が違う。全域で、ツブとタニシの併用が



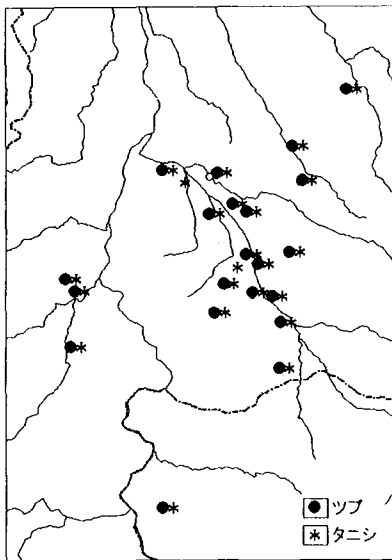


図8 2004調査【たにし】<sup>19</sup>

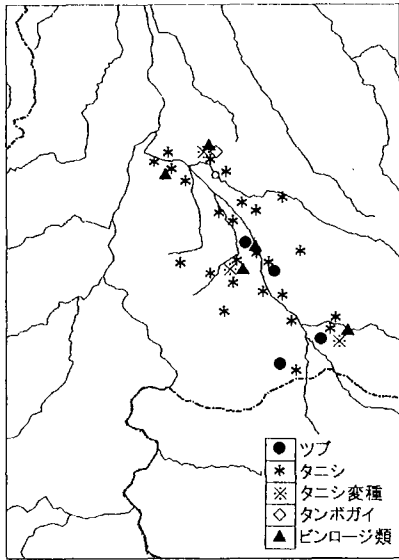


図9 LAI1959【たにし】中学生

起きている(地図8)。なお新旧が確認できた地点では、ほぼツブが古くタニシが新しいという報告が多かった。

他の語形として、タノツブ・タノシツブとも言うと答えた話者から「堆肥を入れる竹かごのこともツブと言うが、それに似ているからか」との語源解釈を得た。

## (2) 他の資料から

「たにし」のツブという語形に関しては、古くはもっと広範囲で行なわれていたとみられ、文献にもこれを記したものが多い。例えば、『物類称呼』(越谷吾山 1775)<sup>20</sup>では、「田螺 たにし 畿内及西国東武其外国々にてたにしと云。土佐国にては一名田貝と云。北国及房総又駿河相模伊勢路にて田づほといふ。又「つづ」と斗も云【和名】に【拾遺本艸】を引て田つびと書り」とあり、また、『本草綱目啓蒙』では「田螺」の項に「タツビ 和名鈔 タツブ 能州 タツボ 北国武州総州駿州相州勢州 ツブ 越後 タガヒ 土州 タニシ」とある。

「たにし」についてのツブの分布はかなり多くの地域で報告されている。長野県では、『信州方言風物誌』(前出)や『長野県史 方言編』(長野県 1992)、『小谷村誌 自

<sup>19</sup> ツブ・タニシ併用の場合はツブのみを示した。

<sup>20</sup> 京都大学文学部国語国文学研究室編(1973)による。

然編』(小谷村誌編纂委員会編 1993)などにみられ、根知谷と接する北安曇郡一帯でもツブが行なわれていたことがわかる<sup>21</sup>。また、浅川清栄(1953)では、長野県全域の高校生に対する通信調査で「たにし」を取り上げている<sup>22</sup>。これを見るかぎり、当時の高校生でも、南北安曇・東筑摩・上伊那・諏訪・南北佐久でツブ、下伊那・西筑摩でツボが優勢である。他の地域はタニシまたはその変種が多く出ている。新潟県以東または以北の資料は『越後方言考』(小林存 1937)にツブガイ、ツブが各郡市に分布しているとあり、『新潟の言葉』ではタツブ・タツツブ・ツブガイ・ツブ、『米沢言音考』(内田慶三 1902)にもツブが出てくる。西は、『富山県方言』(富山県教育会編 1919)にタンツボとタンノシがある。

では、LAI はどうかというと、分布の状態は、高年層において、姫川沿いにツブが広がり、タノツブ・タツツブという語形が糸魚川地域のほかの川沿いにみられる。この語形は根知谷内でも若干みられる。LAI の根知中学生調査(図9)では、全域にタニシが広がり、わずかだが「かわにな」との混同もみられる。個人に注目すると、ツブを報告している中学生は、タニシまたはその変種も答えている。

なお、当該地域では「肥料かご」のこともツブという場合があり、糸魚川地方全域にみられる。根知谷においてはこれを表わすのに、上流域ではモッコ、中流域でツブとモッコの併用、下流域ではツブというふうに分布することが LAI で述べられているが、今回の調査でも複数の話者から似たような状態であることを確かめることができた。このことから、この道具のことをツブと答えている地域では、「たにし」とそれとを区別し、「たにし」についてはタノツブ・タツツブなどの語形を使用していたことが想像される。

ここまで見てきたところ、一点、2004 調査と LAI とで予想外の結果が出ている。根知中学生調査の結果から「全国共通語の taniji に追い込まれつつある状況とみることができる」と LAI の解説で述べられているが、このことから考えれば、今回の調査でもタニシ優勢となることが予想されるはずである。しかしながら、2004 調査ではツブとタニシの併用という結果であった。LAI 中学生調査の対象者は現在、50 代後半になっているはずであり、2004 調査で対象とした 70 歳前後の話者とそれほど年齢が離れているわけでない。それでは、なぜこのような結果となったのであろうか。

<sup>21</sup> 『北安曇誌』(北安曇誌編纂委員会 1984)ではツブしか書かれておらず、細野淳(1954)にも「全般にツブという名で総称している」とある。同論文には「かわにな」をベベツブ・カワツブとも書いてある。また『北安曇郡方言取調』(長野県北安曇郡役所 1897)では、「ツブ 田螺 ツブハ螺の総称ナリ田螺ニノミ称するは誤」とある。

<sup>22</sup> この調査の対象者は現在 60～70 歳と推定される。LAI の中学生調査対象者が現在 50 代後半である。この二つの調査は似た性格を持つと考えてもよさそうである。

### (3) 「たにし」を表わす語形について

当該地域において、古くはツブが覆っていたところに、タニシが新しく入ってきたことは、多くの資料が示しているところである。ツブやタニシのそれぞれ変種と思われるものについては、今回の調査では資料となるものが少ないため、ここでは言及を控え、主にツブとタニシとの現われ方について考えてみると、以下のようなことが挙げられる。

まず、LAI と 2004 調査 とで調査方法に違いがあり、そのことが結果に影響したとみられる点である<sup>23</sup>。あるいは、LAI 調査の後に当時の中学生がツブという方言形を地域生活の中で習得したとも考えられなくはない。しかし、いずれも想像の域を出ないため、今後、他の年齢層や周辺地域の情報が待たれる。

なお、年代別アンケートの「たにし」についての回答では、小学生にタニシが多く、また「かわにな」との混乱が若干起きている。40 代以上にツブの回答があったが、その場合でもほぼ全員がタニシとの併用であった。

## 4. まとめ

本稿では、語形の変化(または不変化)の要因として、まずはじめに語源解釈を取り上げた。「蛇の抜け殻」をキヌ・キンどちらでいうかについては、話者の語源意識が関係していた。この変化は、語形と語源解釈との関係が安定していないところに起きる。もともと、衣服のことをキンと言っていた地域が、そう呼ばなくなっただろうことと、相接する長野側にキヌが優勢であったことで、合理的であることを求めた結果、衣服の呼び方と同じようにキヌに変化した場合と、お金や金色と結びついてキンを保つところがあつたと解釈できる。

また、「かわにな」を表わす語形の 3 拍目に注目したとき、LAI において根知谷にはみられなかったピンドー・ピンドジなど - ド - が現われている。これは LAI で糸魚川市街側にみられた状態そのままであり、この項目については全国共通語形がそれほど認知されていないことから、今後どのような変化の過程をたどるか報告が期待される。

<sup>23</sup> 2004 調査では、初めに自由回答を求めるが、その後、あらかじめ想定される語形を提示する質問形式を採っている。これまでの方言調査で言うところの“誘導”である。これを行なったため、ツブという語形がほとんどの調査地点で確認できたのだろうと考えることができる。しかしながら、これだけでは、LAI においてタニシが多く報告されたことの説明がつかない。そこで、LAI の中学生調査の方法を見てみると、以下のように述べられている。ここに原因があるのかもしれない。

調査の方法は、教室に全員を集めて行なう集団ペーパーテストである。インストラクションを与えて、語形を 1 枚 1 枚のカードに記入させた。片仮名で書くように要求したが、これはよくなかったようだ。すでに、当時から生徒たちの片仮名を書く能力は落ちていた。

「たにし」については、LAI から予想された全国共通語形ばかりが現われるという状況にはなっておらず、調査方法の違いが調査結果に影響する可能性を指摘した。ただ、これは単に方法の違いであると断定できるわけではなく、全国共通語化も含めた、現在の地域方言の変化をとらえることの難しさを表わすこととなったかもしれない。

以上、LAI 調査から約 50 年を経て行なった 2004 調査から、特に伝統的方言形の変化とその要因について取り上げた。

#### 【参考文献】

- 浅川清栄(1953)「信州における方言分布の研究」『信濃』5-2、信濃郷土研究会)  
浅川清栄(1958)「長野県における「蝻」の方言」『信濃』10-11、信濃史学会)  
石川恵美子・柴田武(1977)「糸魚川方言の 20 年間」  
『日本方言研究会第二四回研究発表会発表原稿集』  
内田慶三(1902)『米沢音考』目黒書店  
大島曉雄・松崎憲三・宮本袈裟雄・駒形昶編(1996)「新潟県の民俗」  
『日本民俗調査報告書集成 中部・北陸の民俗 新潟県編』三一書房)  
小谷村誌編纂委員会編(1993)『小谷村誌 自然編』小谷村誌刊行委員会  
河原宏(1959)「たにし」と「けむし」の方言」『信濃』11-11、信濃史学会)  
北安曇誌編纂委員会(1984)『北安曇誌 第5巻近代現代下』(北安曇誌編纂委員会)  
京都大学文学部国語国文学研究室編(1973)『諸国方言物類称呼 本文・釈文・索引』  
京都大学国文学会  
W.A.グロータース(1970)「鳥瞰的広域言語地図と微細言語地図」  
『方言研究の問題点』、明治書院)  
W.A.グロータース(1985)「新しい方言が出来るとき」『言語生活』399)  
幸田文時編纂(1925)『さとことば』栗原九十九  
小林存(1937)『越後方言考』高志社  
柴田武(1967)「民衆語原について」『国語学』69)  
柴田武・W.A.グロータース(1988-1995)『糸魚川言語地図』秋山書店  
杉本つとむ編(1974)『小野蘭山 本草綱目啓蒙一本文・研究・索引一』早稲田大学出版部  
鶴巻武漢(2001)『新潟の言葉』私家版  
寺島虎男(1907)「北安曇郡の動物方言について」『信濃教育』492、信濃教育会)  
土井忠生・森田武・長南実訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店  
東條操編(1951)『全国方言辞典』東京堂  
富山県教育会編(1919)『富山県方言』富山県教育会  
長野県(1992)『長野県史 方言編』長野県史刊行会  
長野県北安曇郡役所(1897)『北安曇郡方言取調』北安曇郡役所  
福沢武一(1956)『信州方言風物誌(一)』柳沢書店  
細野淳(1954)「長野県北安曇郡地方における動物方言」『信濃』6-3、信濃郷土研究会)  
柳田國男編(1939)『歳時習俗語彙』岩波書店  
渡辺富美雄(1974)『新潟県方言辞典 佐渡編』野島出版